

1919年(大正8年)[24歳]

「小池政美日記」(6)

— 1919年9月3日～10月31日 —

小池政美

○1919年9月3日(水)

前の日記——本年の第5巻は随分長い間の Via Dolorosa 「苦難の道」をその中に収める6月の半から9月の2日まで合計11週間近くである。6週間毎に1冊づづ書いて来た事に比うと量に於て特別に貧弱であつたと云わねばならないけれども、その質に於て実に美事なものであつたことは彼の巻に「彼の聖なる夕、Life is real, Life is earnest!」(人生は真実なり、いくる まこと人生は厳肅なり!)と名付けるを得た事に見ても明らかな事である。願わくはこの巻をも御光を慕い御足を追いて御下に至る尊き有難き一步たらしめ給え。

葉山にて、アーメン。

佐伯純一さんが今夜立つ事は聞いたけれども葉山を急いだために終に会う事出来ず、7時15分で来る。一寸三月の中に海の様子はすっかり変つてしまった。もう夏の海でなく、やがて秋の海である。海は好い。人の知らぬ好い所が多い。

○1919年9月4日(木)

午前、栗屋へ手紙を書いた。午後、佐伯さんへ書いた。書く者の心は穏やかである。静かに書かれる手紙は書く人と読む人との心に安心と喜悅と驚愕とを与える。

佐伯さんから夏になつてから3、4本手紙を貰つた。最後のもの即ち24、25日頃のが最傑作であつた。それに対してはこちらも立派なのを書かねばならぬと思うもの——而して又一方から見るとはこの正直な手紙こそ7月に書けず8月に又書けざりし事を書かせようとして居る。書こうと思つて出して見ると、それは日記の殆ど大部分をうつす事になる。是は大変な仕事だと思う。とても今の僕には出来そうにもない。出来相にもないと思う中にしかなければならないという心が僕を追いつめる。いつかよき指命があるであろう。Eulogy 「讃辭、称賛」を奉るには奉る可き時がある筈である。その時を待つ外ない。

僕は一体物事を絶対に見る癖がある。是は至極よい事だ。有難き独力だと思つて居る。しかし是は世の中にも通じない事である。僕はAも下らぬ人間と思う。しかし世の中はAを下らぬ人間とはしない。AはAなりに下には下のあるものでBとの比較上並の人間として通用する。不思議なものである。であるから又僕は人にそのロジを奉る事は嫌である。と同時に自分がほめられた時のつらい気持を知つて居る結果、人をほめる事は善い事ではないと考えて居る。特に対者が神に依る人である時には、その人の喜怒哀楽は悉く神による



と知る時にはそんな人に対して批評をすべきではないと心得る。是は他の辞で云えば

「神に祈る人の心は絶対である。小さな人間が批判を加える余地なし」

という事になる。しかもしきりにある種の人に対しては僕の心は、口は感謝の念と賛成の意を表せざるを得ない事がある。その時はしかし好く考えるところの人をどうこうというのではなく、その人が神の大きい計画の一部として動いて居る時は「彼」の力を讃美するに他ならぬ。というのは、はかりなく人自身決して自己の力に依り起こつてここに至りしとは考えがたい。黙して流るる涙を以て御名をたたえ御顔を仰ぐが故である。

〔文庫編集者註：「然り、アーメン」という青字の辰雄の書き込みあり〕

かかる人を今日は二人持った。一人は栗屋である。一人は佐伯さんである。

〔同編集者註：この段落のあとに青字で「うらぎられし人は幸である」と辰雄の書き込みがある。辰雄は兄政美の日記を1926年頃から読み始めたようである。〕「辰雄日記」の1926年8月12日には、次の記載がある。

「昨日、兄の日記の中で『準備はよいか?』と云うのが記されてあつた。これ実に常に僕への忠告の声である。かく思つて勉強しよう。然り!と。……」

佐伯純一氏はかつて我が兄の無二の親友であつた。我が兄は彼を信じた。彼のためにどれほど骨折つたか知れぬ。自己を空しくしたかしれぬ、祈つたかしれぬ。而も何事ぞ聞くところによれば、彼は杯を手にする輩と化したと。げにこのことを母の口より伺つた今日ほどおどろきしはない。彼を疑いつつも、よもやと一縷の望みをつないでいたのに、もはや全く絶えた様な気がする。彼の手紙も写真もすぐに彼に関係するものを今日は破棄した。天の兄上はいかに驚きかなしんで居られるだろう。佐伯さんは兄上の声を今きくだけの良心さえないか。兄上の涙の嘆き Seufzen 「嘆息する」をきかないか。もし彼が本当に信仰を失つたのなら、実にこれにまさる驚くべきことを僕は知らない。純真な信仰を以て彼を信じたる兄をあざむきたる彼は悪魔そのものであつたのか。あまりにおどろく。また実になしむべきこと。彼のために祈つても祈りきれない惜しいことである。されど、いつかいつか赤裸々に懺悔するの日が来るならば、そのとき僕は涙を流してゆるすだろう。兄もゆるすだろう。

高島の今は桑原の嘉代子様は独り信仰の道を歩んで居られるかしら。お祈りする。彼女は恐らく不信の夫、兄弟妹に囲まれて、聖書も開き得で、涙の祈りの日を天の鴻子おば様を慕いつつ、送っているのではないかしら。高木八尺様、どうか親族のお身、おなぐさめ下さい、お祈り下さい。僕も祈ります。おば様に愛せられた私、このことをなさでは居られません。ホゼヤと反対に、妻たる嘉代子様のために本当に。この間、8月2日のおば様の召されし日に手紙を書いた。はたしてお手にとどいたかしら。届いたなら有難い。それでよい。お返事はいらぬ。しかし届かずに途中で破られることがあつたなら、悲しくある。しかしそれでもよい。天の父様に申し上げる祈りは、きっと天の父



様がきいて下さる。いつか嘉代子様も感謝して下さろう。いつかきつといつか。嘉代子様と僕とは、おば様と兄上の故に信仰の話をなすべく涙のうちに手に手をとって父に感謝し奉る日が来るだろう。人の妻なる彼女の故にこのことを肉を以てなすことは出来ぬ。ただ霊の使、はとのみがなす。……」

栗屋は一夏を熱い一夏を勉強に暮らして今月1日から今日まで文官試験をうけて来た。佐伯さんは苦しい楽しい三日三晩を過ごし一夏を色々の意味に真面目に送った。今や東上して一生一度の結納の式に臨もうとして居る。書く人は彼等の行動が神を仰ぐに起こりし事を承知して悦ぶものである。

よき手紙が書けなかつた。夜もよかつた。

海もよかつた。夜もよかつた。9時の祈り、寝る前の祈り。

ローマ書が段々よく判る。つまらぬコンメンタリー「註解」を離れてよかつた。少なくともローマ書のコンメンタリーは失敗である。最上の註解はその人の経験のみといわる内村先生の古き辞が段々判つて来る。4章終りより5章初めまで。

○1919年9月5日(金)

午前よく泳いで、午後遂々箱根に来る。勝磨さんにひっぱられてである。小涌谷は美しい所である。其所に立つ団さんの別荘は又特別の所に立つた美しい一群の建物である。敢えて一群という意は一棟の母屋の外に道を挟んでお茶室がある。涼み台がある。□□□□であるからである。山は僕の好きな静かなアウトラインを持って居る。ここにイライラしたような気分は少しもない。杉も松も紅葉も現代離れをしてのびやかに茂つて居る。さても美しい所に来たものである。

夜に入つて月は美しかった。十日位であろうか。那須野に見んと願ひ八ヶ岳にと動き、最後には軽井沢でと思いきや、箱根小涌谷で見る事になったのである。久し振りの快晴に葉山から富士が見え箱根が見えたこの良日は良夜に月と星とを眺めて祈る者の心は静かであつた。

夜は夜着が厚すぎるので手を出せばさむすぎ、といって入れれば暑すぎ、それに連日の二回の海にひきかえて今日は一回しか入らなかつたので、久し振りで寝にくかつた。

○1919年9月6日(土)

6時半出発——7時半芦ノ湯発——湯ノ花澤——神山8時45分——冠嶽——大涌谷——上湯——仙石原郷楼——団さんの地面——自動車で小涌谷へ。

さてもつらき罪の一日。……〔英文略〕……

一刻が一生の傷になる事を今日始めてしみじみと味わつた。自己に生きんとするきたなき男よ。一体そんな事でどうするつもりなんだ。聖書を読んで居ると称しつつ一体それで



どうするつもりなんだ。

彼のお陰で漸く一日一日を生きつつそれを彼のお陰としりつつも未だ自分が死にきれぬ結果として、時々生来の虚栄心が一寸なんでもないような顔をしつつ出て来ては小さき一人の人間を支配してしまう。クリストよ、ジーザス・クライストよ、この小なる人間をすつかり殺して下さいまし。嘗てはあなたのお顔を見せ給えかしというのが何よりの願でありましょうか。今は只殺し給えという事を願い奉ります。どうぞすつかり殺して下さいまし。是をのみ祈り奉ります。

団さんの地面は、仙石の地面は美しかった。一面に大きな大きな木が茂って居た。しかしながら神様は幸にして僕をかかえるものに寡欲ならしめ給うた。

見る人のありやなしやをよそにして

ひとり静に舞う胡蝶かな

「よそにして」とは余りに意思が入りすぎる。自力すぎる。問わずしてもまずい。知らずしての方が好いかも知れない。又「ひとりしずかに舞う胡蝶かな」もうまくない。胡蝶も美しくはあったけれども、舞そのものも実に美しかった。

神山のもとにて。

見る人のありやなしやを知らずして

ひとり静に胡蝶の舞う哉

昨年7月7日戸隠第一も日曜に奥社に行つてあの大きい杉の木立の根下に小菊を見て感心してしまった僕は今日神山の頂近く「はこねまだら」が美しき羽を静にかかげて——決して翻してという急速度はなかった——舞うを見て又感心させられてしまった。どう考えても僕は是で行く。武田のおじ様は何とか仰しやるとそれはクリストの教えとみなして遠ざけられる。母様は何とか仰しやると、人間にはある程度までの利己心が必要であると仰しやる。乍併トロイロマイの十字架観、僕等の勉強の三段の進歩を思い出す時にこれ等の批評は木葉微塵と碎れ去つてあとかたなくなる。是は世の中を渡るには不相応な道であるかも知れない。しかし人間は世の中を渡るために生まれて来たのでは無い。人間が生まれて来た理由は又、それぞれの人に依つて異なる可きではない。万人悉くやがて神の御前に立つ可き運命を有する事を忘れてはならない。その時にLife is real, Life is earnest!「人生は真実なり、人生は厳粛なり」という声は本当に聞こえて来る。realでありearnestである可き時には人は何を言おうともよろしいのである。それは一顧の価もないのである。他人に自分の心の全部が判ろう筈はないではないか。

小涌谷の西洋間はほしい室の一つである。中に卓子に向かう人達も世間の苦しい行路難を少くともかくし蔽わんとする人である。その一人の苦しきライフを過ごして来た人で、すいも甘いもかみわけた人であるにしても又他の一人の苦しい過去をなめて来た人である。どれもこれも楽な生活から来るままにと親切——無関心とを有するとするも、少くとも金



で世の中が動くと考える点に於て僕の悟なしと考える人達である。まどの外から内部を見るが好い。

〔註：「小涌谷の西洋間」の見取り図あり。室の中央に六人掛けのテーブル。〕

○1919年9月7日(日)

冷しきの余り遂々お腹を下してしまった。

よき日曜であった。昨日一昨日の苦しさが身にしみて、今日は謙遜であり得た。ローマ書第7章がひしひしと身に來た。

「ああ我が悩める身なる哉、この身を救う者は誰ぞや」

というポーロの深き呻きも今は身の叫びとなつて來た。よく判るよく判る。我中にある罪のしわざといいきる——いいきりしポーロは幸なる哉。

質ちゃんの所で見たあのお盆を若しやと宮ノ下に捜したが見つからなかった。午後2時芦ノ湯を立つて原氏訪問。夜9時までゆつくり楽しく子供らしく暮らした。9時になつて辞して帰る。十三日の月は美しい山々の外郭を見せて呉れた。下り一里の夜の山道是も当分忘れ得ぬ景色である。

○1919年9月8日(月)

まだ腹が下る。浅間山へ一寸登る。箱根の小さな街々が目の下に見える。神山も見える。駒ヶ岳も見える。この美しき山々の名を聞くだに嫌わしくせしむる我が心中の罪よ。願わくば神様この刺をぬきとり給え。

午後、小涌谷を辞し勝磨さんと一緒に東京へ帰る。山を下るとすぐ10度も温度の異つたのには流石に驚いた。

○1919年9月9日(火)

午前中疲れて休む。夕、西片町、浅嘉町へ龍ちゃんを送つて下さったお礼に伺う。それから佐伯さんに廻る。10時すぎまで色々の事を語った。正ちゃんに勉強するように僕と相談の上すすめて呉れというおば様のお辞があつた相である。困つた彼の心事を語り会う外なかった。

お美喜さんを先生の所へ連れて行くつもりかと聞いたたら、まだ考えては居ないが高島さんのお嬢さんにお願したらどうか知らという。僕は西片町は最近嘉代ちゃんに対して好感を持って居らぬと思われる事を告げ、めんどろではあるまいかとの考を漏らした。9時久し振りで一緒に祈つた。夜雨。



○1919年9月10日(水)

休の最後の日を静かに楽しむ。トルストイの二十三話を読み出した。

○1919年9月11日(木)

雨。久し振りで役所へ出る。十日休んで居る間に調査月報7月号の発送の手順にまでなつて居た。

夜、佐伯さん多くのニュースを持つて来る。田中さんのお父君御逝去との事。正ちゃん立教大学へ入学との事。西片町へ上りやや尋常に帰れるお美喜さんを見る。曙町へ廻り、ファウストの事など聞いて帰る。

○1919年9月12日(金)

雨。麻布へ行き、大久保へ行く。

静かに机に座すると耳に入るものはこおろぎの泣声ばかりである。二日三夜降り続いた雨は塵と共に騒音をも地の底へ埋めて呉れたのかと思う程である。

静かにこんな事を考えて居る中に急に手紙が書きたくなった。佐伯さんにも書きたい。栗屋にも書きたい。お美喜さんにも書きたい。誰にも彼にも書きたい。

が書きたいと同時に書かねばならぬ手紙が二本ある。一本は田中さんへである。一本は正ちゃんへである。それを書けば今夜もよくその使命を果たしたものと云わねばなるまいか。

○1919年9月13日(土)

いやな天気である。夜、佐伯さんと一緒にファウストを聞きに行く。丁度佐伯さんの一人前で切符が売切れてしまった。結局聞きに行くという事は出来なくなった訳である。このタウゲニヒツの記念のために彼はトルストイのコンフェッション〔告白、懺悔〕を買った。僕はエリオットのダニエル・デロンダを買った。

例の道を本郷まで歩いてしまう。愈々日曜からお美喜さんを誘うと云っていた。弟さんも行かれる事になるのであろう。

家に帰ると母様も柏木兄弟団〔註：内村鑑三の元に形成されていた様々な会が合同して成立した組織、柏木教友団とも言う〕からの葉書を御覧になって28日の日曜から行きたいと仰しやる。母様がゆきたいと仰しやれば願って武田のおば様も行らっしゃる事になるかも知れない。乍併、どなたに対しても僕は多くを予期してはならない。人間の事は人間が予期し計画する事を許すかもしれないが、人間の事ならぬ事——而して凡てが人間の事ならぬ中でも殊にこのことは人間の事でないのであるが——に関して人は只神の御意思を読み得るを以て有難しと心得可きで夫れ以上、一步もその□□をこころむ可き所ではない。どなたもの個

人性——即ち神が彼女等を救い給わんとする各の運命使命を尊重して気永に眺め待つの外は無い。「青字で「アーメン、真の祈り」と辰雄の書き込みあり」
夜、豊美さんの事について武田のおじ様の態度に困っていらつしやる母様のお話を伺った。

○1919年9月14日(日)

休息の一日。夜、激しい雨の一日。

○1919年9月15日(月)

丸善に行つて勝磨さんと一緒に読む本を Wagner の Lohengrien ときめる。

○1919年9月16日(火)

昼、佐伯さんのお母さんと季一君とを東京駅に迎える。吾妻おば様、貞ちゃん、佐伯さん、僕の四人。

夕、麻布へ行く。明日幾何の試験とか。すんだら8時に近かった。ローエングリンはイントロダクションを終り1頁半程本文に入る。

○1919年9月17日(水)

純一さんにお祝の本は Resurrection [復活] に決定した。どうぞ注意して深く深く読んで頂き度いと思う。是は僕のややマスターしたトルストイの唯一の大作で是を読んだ事の彼の氣持をどうしても忘れる事は出来ない。同じ氣持または是に似たるものか。新に是を読む人の上にもあらん事を願わざるを得ない。

夜、佐伯さん見える。共に祈つて明晩を待つ。

「……汚れた世の中なるは一步先に出了した丈に私の目にまず入りました。是に放つておかれば誰をも彼をも汚してしまいます。汚れしものが汚れ行くのはまだありますが、ここまできれいに来たものが汚れ行くを見た事は私の心の忍びざる所であります。どうぞ神様是より二人となつて歩き行かんとするこの兄弟の上を特別に恵み給え……」
よき祈りであつたと思う。

○1919年9月18日(木)

夜、伊幡紋へ行く。佐伯さんから三人、大野さんから二人、西片町から六人、家の二人、合計十四人のお膳である。佐伯さんは静かな好き一日でありましたと悦んで居た。本当によかった。どなたにも心からのお祝を申し上げる。

○1919年9月19日(金)

夕、吾妻おじ様おば様、佐伯さんのお子様、佐伯さん、お美喜さん見える。お帰りになった後に無愛敬だと母様から叱られた。持って生まれた顔を如何とも致し方なしと思う。愉なしからず。

日本銀行で貨幣を焼くのを見に行つた。封印をしにである。錠を開くのは月曜朝との事。

○1919年9月20日(土)

石坂の来らざる事今日で三日である。一週間の用事は仲々すまなかつたため土曜ではあつたが4時までのこる。それから代々木に出かけた。石坂も月曜から出る相。彼等は用事を持つて来たのも何の事はなかつた。

代々木から上野へ廻る。義雄さんが仙台から来るを迎えにである。二月見ぬ間に非常に大きくなった。又わんぱくらしくなつて来た。夜、吉彌さん見える。龍ちゃんの荷物滞りなく出来た。

○1919年9月21日(日)

待ちに待つた日曜である。朝、上野に龍ちゃんの荷物を出し、家に帰ると何とはなしにつかれてしまった。

十誠の講義を古い雑誌の中に見つけ、湯に行き、一寸休み、トルストイの二十三話を読んでそれから佐伯さんへの手紙を書くや書かぬに早1時である。大変あわてて大手町へ行く。お美喜さんは前列の第一番に居た。佐伯さんは後の方に居る。変だなと思つてきくとかえりが許さないという。しかしもう一度話をしかえて例の処に静かに坐つた。有難いお講義であつた。十誠がすむと山上の垂訓を、山上の垂訓がすんだらローマ書へと仰しやる。誠におみきさんのためにも誰の為にも本当の好都合とは是の事なる哉と思う。

高島さんからはどなたも見えて居なかつた。どうなすつた事であろうと思う。近い中にお手紙をあげる外致方無いかとも思う。一方に厳格に簡単に世の中を渡れという命令がある。

本郷までお美喜さんを送り例の道を歩いて例の所で別れる。只時間の早かつた事は今までに其の例を見ずである。

栗屋の都合で皆と一緒に御飯を食べる事を一週間延ばした。

藤井さん「ヨハネ黙示録第1章の研究」……〔講演要旨省略〕研究……。

内村先生「モーゼの十誠」……〔講演要旨省略〕研究……。

○1919年9月22日(月)

8時少しすぎに仕事を始め、日本銀行へ行き、上院決議を訳して昼に至り、午後2時か



ら4時半すぎまで働いた。夜は麻布へ行き、又トルストイの「勤勉と怠惰」とを読んだ。よき労働の一日である。

空に溢るる星を見、地に流るる虫の音を聞きつつ、秋の既に身の周囲にあるを覚ゆる。田舎も固より好い。乍併東京の秋も亦捨て難く好い。只何時になつてもきたなきは人間の心である。

今日も大竹さんの結婚延期に関係して夫婦の真相というようなものをきかされた。又武田のおじ様の下らぬ下らぬやりとりを聞かされた。僕は何とすべきかを知らない。かれはかれの行く所へ行くがよいと放っておけなくなる。但し Vengeance is mein!（復讐するは我にあり）である。僕は只黙す外ない。

○1919年9月23日（火）

つまらぬ話——聞きたくない話をこんこんと12時過ぎまで少しも話したくない。只致方なしに聞かせて下さる母様から伺った。お蔭で今日のねむい事と云ったら無い。

お蔭で又仕事も少しおくれる。かたがた本をみつめて歩いたのと——Mayers: St.Paulの訳を買う——明後日から朝歩きたいと思うその下路みに歩いて帰ったために家についたのは7時に近かった。帰って見ると今夜来ないかと十拳君から葉書が来て居る。惜しい哉と思つたが如何とも致方が無い。静かにセント・パウロを読みつつ秋らしい夕を楽しんだ。

○1919年9月24日（水）

秋季皇霊祭。下田先生——お墓。西大久保。おば様のややお痩せになつていらつしやるお顔を見て豊美さんに就いてここにも頭を悩ます方が一人あるなと思つたが、喬さんが居たため思いのまま伺う事も出来なかつた。しかし段々お話を伺つて行く中に昨夜不図目がさえてしまったため今日も寝不足と知つて、おやおや暢気でいらつしやるなと思つてしまふ。田舎の住居を殊に楽しんで居ると仰しやつた。

それ丈で人間が助かるものではないという気がする。しっかり歩かねばならぬ短い日を徒に消して行く方がお気の毒でならない。何とかして上げられるものなら上げたいものと思う機会の与えられん事を。

〔註…この段落に対して、青字で「僕の使命」と辰雄の書き込みがある〕

末広で西片町、曙町、家。忘れられぬは帰りに須田町で佐伯さんのおば様のお手をとつたお美喜さんとおば様との調和。是を Happy Harmony! と云わずして何と云う可きであろう。

朝、マイアズの聖パウロを熱心に読んだ。夜、トルストイの第一步を読んだ。読んで何が故に菜食論者なりしかを漸く知り得た。動物を食わぬという事は非常によい事であるのかも知れない。しかしそれが完全なライフへ行く第一歩である。かくの如き善行をつみに



つんで久遠への歩々を進めて行くのであると聞いて、僕と信仰を異にするにおどろかざるを得ない。Resurrection[復活]を読んでネリユードフに傾倒した佐伯さんと「リザレクション」の意をトルストイと同様に解したのであった。アスローヴァに涙をそそいだ僕は僕の心でトルストイ読んだのであった。

〔註：『復活』は、レフ・トルストイの晩年の長編小説。若い貴族とかつて恋人だった女の、贖罪と魂の救済を描き、それを通じて社会の偽善を告発する。『カチューシャ』は、この小説『復活』を原作とし、日活が1914年製作した日本のサイレント映画。島村抱月、松井須磨子による新劇の劇団芸術座が『復活』を題材に取り上げ、1914年3月に上演され、松井による劇中歌『カチューシャの唄』もたいへんなヒットとなった。辰雄は晩年、この唄をよい声で歌っていた当時の兄を想い出しながら、自宅での武蔵野日曜集会の午後感話会で時々歌っていた〕

○1919年9月25日(木)

初めて朝歩く。40分かかった。麻布。佐伯さんのおば様を東京駅にお送りする。銀座を散歩する。

○1919年9月26日(金)

夕方、大竹、河西、溝部の三君が近々西伯利^{シベリア}へ行かれるのでその送別会が今文であった。7時半帰る。帰りにとうとう厚い重い只とりえは字が大きくて読みよい丈の聖書をとって帰る。又、『聖書の研究』も100号以来すっかりそろった。ありがたい事である。

○1919年9月27日(土)

午後、新人会。夕方まで聞いて帰る。

夕、嘉代ちゃんから手紙を貰う。大分苦しんで居るようである。僕がオヤオヤと思う事は、もう内村先生のお話を伺うをやめて、カトリックのマス(ミサ(ラ：missa, 英：mass))にのみ出るという知らせである。大変苦しんだが結局真と信ずる道を歩く外ないと思うと書いてある。そしてカトリックは神キリストが立て給いし所であると信ずると書いてある。いつか嘉代ちゃんの信ずる所以が僕にも判る事を祈ると書いてある。最後に僕の見解——カトリックに対する見解はどうか聞かせて呉れと書いてある。カトリックと僕との関係が又世の中に出るのかなと思う。しかし夫よりも少し大きい問題を与えられたのに気がつく。嘉代ちゃんは僕のために何だかを作ってくれたとある。しかし高島のおば様は夫を僕に送るのをさしとめられたとある。さしとめられて憾みに思う所無きを得ないとある。世の中はどうしてこんなに汚れた方へのみ見られるのであろうかとある。それが頭と心とに余る問題である色々な事が頭に浮かぶ。とてもまとまりがつかねる。明日を待とうと思つて



早く寝る。

〔註…1919年11月1日の日記に、「嘉代ちゃんが僕の大学を出たのを祝して作って下さった写真立と、今作りつつあるクッションとを下さるとおば様はおっしゃる。嘉代ちゃんにお礼を云って僕にお祝を上げさせて下さいと願う。……」とある〕

○1919年9月28日(日)

朝、厚い重い聖書に、

「1919年9月28日

母上様

政美」

と書く。書く者の心は冷たい。彼は彼が聖書を彼の母のために買う分をとった事。及その聖書の代価が彼女の信仰とは全然無関係なのをよく知っている。代価の如きは月の末から来月の初めにかけて金の入用な事が好く判って居る折からむしろ預かるうかと思つた程である。信仰は各人が神から給う所。指導者も友人も殆ど何等関する所のないのを好く知つて居る。それ程冷たい心を持ちつつ書いても書く手の振るえる程、彼の心の中には喜がある。あり得べからざる事のように思いつつも幾度か願つて居た事実が不意に全く以外に早く目の前に表われて来たのである。ありのままを云えば、意外というよりも毒気をぬかれる程、もつとその利那の気分を云い表わせば、かえつて聖書を読む等と云つて下さない方が有難いのにと思う程、突然にこの事が表われて来た。

乍併是で祈の全部が出来上がったとは思えない。佐伯さんと二人で正ちゃんが聖書を読むようになれば好いと語り合つた。一両日後正ちゃんが立教大学に入つた事、従つて一週に一度は聖書の時間のある事を知つたけれども、それで佐伯さんと僕との願つた事は成就したと思えなかったのと何等異なる所はない。まだまだである事を彼は好く知つて居るから、今日も午後になつて浅嘉町から彼女を是非にと呼びに来た者があつても、彼は彼女が残念がる程も惜しくは思わなかった。但し先生のお話を伺つた後には、残念だと云いつつどんなに残念な事をしたか、彼女は好くは知つて居らぬとつくづく思わざるを得なかった。厚い重い聖書に謹んで如上の文字を認めてからローマ書8章をよむ。有難い文字である。深い心である。お昼までかかつてしまう。八尺さんに手紙を書く暇もなくなつてしまう。黒い服、黒い帽子、黒いネクタイ、僕自ら選んで最おとなしいと思う服装に身をかためて大手町に行く。

佐伯さんとお美喜さんとが来て居た。渋谷からは今日からは明白に出来ない事が知れて居る。大きい問題の存在を又思わざるを得ない。

〔註…青字で辰雄の書き込みあり。「このころの兄上のこの気持が僕に——全然信仰のない僕に——何となく読み得たことは実に不思議な位であるが、よく考えると、僕はたしかに兄上の信仰の血を受けていたことを感ずる。やっぱり僕は兄上の最も親しき友であ



る。天の兄は、今僕のために「然り！ 辰雄しっかり歩んでおくれよ！」と言っておられる。」

藤井さん。黙示録第1章第3節。福なる哉この御言の文を読む者とこれを聞いて其中に記しある所を守る人々は：「講演要旨省略」。内村先生、本論(其2)：「講演要旨省略」。

本郷で佐伯さん、栗屋、武信君と四人でテーブルを囲む。佐伯さんは8時に(あとでお美喜さんに聖書の講義をするためであった事を正ちゃんから聞いた)去り、僕等は9時の祈をすまし大学の中を散歩する迄一緒に談った。ずい分色々の事を談したがここに大蔵省に見、大学に見たきたない話の一つもなかった事を嬉しく思う。栗屋と大曲で別れて家に帰ったら10時すぎであった。

若し今度の試験にして悪かったら方針を変更する積であるとの事であった。

又母が家を去られた由を聞いた。行く可き所に行き着いたのであると語って居た。そのためにどんなに家の中が近くなったかを語って居た。何事も行く所まで行かねばならぬを深く思わしめられた。

○1919年9月29日(月)

夕、中野に十拳君を訪う。正ちゃんも見える。6時頃から9時少し過ぎまで何とは無しに面白く語った。夕、中野の庭で僕の草案として書いた所、次の通り。：「英文省略」：

○1919年9月30日(火)

夕、麻布へ。

○1919年10月1日(水)

未だ考まとまらず大いにくるしむ。夕、佐伯さんから手紙。井ノ頭行きの事書いてある。秋の思出のために行きたいものである。

○1919年10月2日(木)

役所の帰りに曙町を訪う。第一は田中さんを井ノ頭におつれする事について相談をしてしまう。僕の暦によれば8日が満月、佐伯さんの暦によれば9日が満月。月の具合を見ると9日説が正しい。詳細は日曜に定める事とする。佐伯さんの行く行かぬもその時まで放っておく事にする。

西片町へ行く中途を嘉代ちゃんと僕との友人としての信仰生活について語る。29日夕、すっかりきまつた事——きまつた時には論理的には実に徹底したが、辞は強い一方らしかった。それが段々穏やかに書け相になって来た。若し昨晚曙町に会う事が出来たら昨晚書く所であった。昨晚書けなくて、今朝嘉代ちゃんから「愈々桑原さんにきめた」という話を



聞いた時に、しまった、大事な大事な時機を失したという事にうたれたけれども、考えて見れば益々僕等の態度を明にしておく事は大切なので、どうしても書かねばならぬと思ったのである。

僕は依然として母様にお話しない。温かい清い友人を只無理解から失うを怖れたのである。しかし一人でする事はやめた。佐伯さんの判断を乞うた。佐伯さんは僕が嘉代ちゃんに高島さんのおば様の御意思に従う事をすすめるのを神の道より見ても、人の道より見ても正しと見て呉れた。

安んじて9時少し前から筆をとる。彼が僕のために祈って呉れた事をよく知っている。29日の僕のプランに大体従つてよからう。

「若しお許し下さったらどんなにか嬉しいでしょう。若しお許し下さらなくとも僕等は終りまで神様の道があるきましよう。苦しくとも悲しくともお母様の御意思に従う外ありません」

と書き、

「若しお許し下さらなくとも、もう一度お別れの辞をさし上げる事は出来ると思つて筆を擱きます。終りまで信仰の道を歩きましようね、皆様によろしく、ごきげんよう」

と書いて筆をおいたのは1時に近かつた。書く可き事を書いたうれしさ。歩く可き所を歩み得た感謝。久し振りでよき床に入った。

今日、行政科発表。栗屋筆記試験通過。大臣陳情の件。

○1919年10月3日(金)

大切な手紙を祈を以て出す。佐伯さんにも出した由を知らせる。神様、この手紙により御心のままなさしめ給え。御心のまま知らしめ給え。

よき一日であつた。麻布からの帰、秋酣けたると天見溢るるを思う。感謝である。感謝である。

御心ならばあの手紙、嘉代子さんを苦しめ、嘉代子さんを悩まし、嘉代子さんを浄め、御心のまま歩むを得しめ給え。アーメン。

○1919年10月4日(土)

役所から帰ると嘉代ちゃんから厚い手紙が来て居る。開いて見ると高島さんのおば様からの分も一緒である。

「おば様は僕に誤解とは意外な事を聞く。夫を残念に思う。これからは心配な時の慰め手となつ下さい」

と仰しやる。嘉代ちゃんは、



「何故早く云わなかった。もつと早く言つて下さればこんなにつらい日はおくらずともすんだものを」

と書いて呉れた。

果して昨日の手紙は苦しめすぎる位、お二人を苦しめてしまった。誠に申訳なく思う。只神様のなさった所を有難しと思うまでである。

高島さんのおば様をしてお苦しませした事は誠に申訳ない。本当に申訳ない。第一にお詫をせねばならないと思う。何時行くかが問題であった。又母様に伺う気は出ないので、佐伯さんと相談する。明日は手紙を書いて土曜にお訪ねする事にと思う。

佐伯さん自身は何故か罪に又泣いていた。大学のグラウンドの真中に伏して9時を聞きつつ一生懸命祈った。よき祈であつたと思う。

○1919年10月5日(日)

朝、母様のお尋ねを蒙つて昨近十日程の嘉代ちゃんとの手紙の行来、昨夜佐伯さんと決定した行動の準備、悉くお話しせざるを得なくなつた。

母様は何処までも僕は母様を無視してはならないと仰しやる。僕は心の中で母様を無視するものではないけれども是は母様には判らない世界であると思う。とにかく母様は、頂いた最近の手紙を返し僕のを裂いて頂くようにと云われる。世界は世間は僕達の氣持を了解し切れぬ事を幾重にもお話し下さつた。

内村先生、「十誡」。汝の神エホバの名を妄りに口にあげべからず。エホバはおのれの名を妄りに口にあげるものを罰せではおかざるべし。……〔英文の講演メモ省略〕……

6時少しすぎ何とはなしに落着かぬ胸を祈につつんで中渋谷に出かける。この門を正當にくぐるのは特に是ときまつた用事を持つてくぐるのは、又もつと正確に云えば是程大切な用事を持つてくぐるのは今日が初めてである。大手町で礎雄さん〔註：高島おば様の次男〕に話しておいたせい、それとも何とはなしに僕の来る事を予期して居られたか、或は全然予期なくともさすがに嘉代ちゃん丈あつたせい、それは知らないけれども従容たる嘉代ちゃんに迎えられる奥に通る。

じきにおば様がおいでになって效さん〔註：高島おば様の長男〕方を下げて下さつた。丁度嘉代ちゃんも一寸席を外ずしては居たが第一に片付けねば後が出て来ない事であるから、椅子から立つて長い間勝手な事をのみ考えて居たお詫を心から申し上げる。そこへ嘉代ちゃんも亦入つて来られたので彼女の前にも頭を垂れる。嘉代ちゃんが涙にむせんでいるらしいのには本当に弱つた。おば様はそんなに堅くならずにと仰しやる。一寸席を外ずして下さつたので、第二の大切な用事、即ち僕の頂いた最近のお手紙をお返しして、

「僕のさし上げたのを破るなり焼くなりして下さい」

という事を嘉代ちゃんに願う。



「申訳のない事を致しました」

という嘉代ちゃんの手摺を聞いて僕の心は痛まざるを得ない。それでは訳の通らぬ事になるので、又明白に云いかえす嘉代ちゃんの顔の暗く見えた事を茲に再び繰り返して置く。やがて又お婆様が入って来て下さった。少しの間にお婆様はすっかり気をかえていらした。こんどは色々のいきさつを親しき者として僕に話して下さい。御結納のてんまつをお話になった。おかしいと云えばおかしい事である。おめでたいといえはお目でない事である。皆後には三人で声を合わせて笑う程になった。

「神田とは義絶になつて居ります」

という。思いがけぬ真実のお話もうけたまわった。十拳君はここでもほめられて居る。八尺さんについて思い設けぬお話を伺った。「いきある人に頼る可からず」である。

8時にお辞をする。9時——祈りつつ家に入る。よき日曜日であった。

○1919年10月6日(月)

夕、初めてフロックを着ておじ様のお誕生日お祝に上野へ出かける。夜11時近くまで佐伯さんと語りつつ歩いた。佐伯さんは最罪深きものである事をおみきさんに認めて貰った相である。おみきさん自身も其れと同じ事を佐伯さんに頼んだ相である。実に幸な人達であると思った。

○1919年10月7日(火)

麻布へ。富田さんに調査月報がおそくていけないとしかられた。

夜、高島さんのお婆様からお手紙を頂く。

○1919年10月8日(水)

高島さんのお婆様に何故頂いたお手紙を再びお手許にさし上げたかという理由を明白に率直に申し上げる。

夜、桐法会。杉本先生は遂々お見えにならなかった。鳩山先生は酔っていらして大変であった。柳井が大変痩せたのを見る。

○1919年10月9日(木)

夕から夜にかけて佐伯さん兄弟、田中さんと四人で井ノ頭へ行く。月を背負ったのは愚であつた。井ノ頭で佐伯さんがいう。……〔英文省略〕……

詩でも思ひ出すようにボソボソ独逸語でいうので誰かの文字かと思つた。「誰の」「誰の」「君の」といつて漸く彼の頭は縦にふれた。僕は田中さんのために気の毒に思うのが第一の点であつた。帰りに電車に入ってから書く。……〔英文省略〕……



僕のこのはしり書は彼の心を痛めたようである。如何とも致方がない。田中さんを寮まで送って11時少し前帰った。

○1919年10月10日(金)

愈々辞令がおりた。石坂は国庫の金利度掛へ行った。課長から特別な話はないけれども僕が事実上の大将である。

○1919年10月11日(土)

判任食堂へひきこす。明るくて好い室である。当分はここで頑張る可き事。

2時仕事を置いて久し振りで散歩に出かける。中渋谷へ風呂敷をお返しに持って行く。何かとお話があったが、お婆様がお留守であったので、上る事はやめた。手紙を破って下さった事と

「お祝は来月20日頃」

という事丈を嘉代ちゃんから聞いて辞する。又の機会があれば好いと思う。

森から代々木へ出、堤へ出た。「一人ある時我は強し」という辞をつくづく思う。「命のお辞つかれをいやし」という讚美歌の意味が初めて判った。有難い事である。

西大久保に寄る。まじめな様で合理的の様に浅い浅い暮らし方をして居られるのを見て情なく思う。何も申し上げず只英語の手紙の訳を申し上げた。

帰る。秋の夜は寒くなった。

梅ちゃんが死んだ相である。賤のつらき運命を気の毒に思う。お父様が罪の罪の中に死なれた事を悲しく思う。そのためにも僕は神様の前にひれ伏さねばならないのを思う。

夜、純一さんに手紙を書く。

○1919年10月12日(日)

畔上さん、「コロサイ書の基督観」。

先生、「安息日を聖守す可し」。

佐伯さんと一緒に藤井さんの前に立って土曜のお講義に何うお許を願う。許して下さい。た。お美喜さんに何かをお話しながら本郷まで歩く。今日思いがけなく見えた嘉代ちゃんとお婆様とのどう考えても瘦せられた顔を思い浮かべて心配に堪えない。佐伯さんも心配して呉れる。みんなで実の事実を深く思いつつ大学をぬけ西片町へ行く。

おじ様お婆様お留守。Ave Mariaを聞かせて貰う。何度伺っても非常に好いと思う。高い高いソプラノがアーメンと終ると急に睦ちゃん達が「アーメン、ソーメン」と騒ぎ出した。何も知らずに同じ様な辞を面白がって口にした少年時代を思い出さぬ訳にはいかなかった。お膳に座って食前のお祈をすると又お祈りと云って騒ぎ出す。判らぬ事と云いながらしつ



けの悪い事をつくづく思わせられる。

小さい事小さい事と云う勿れ。問題は小さいに相異ないけれども、問うて居る所触れる所は決して小さくは無い。聖書を本当に読み出して一月经つか経たぬにもうこんなに苦しまねばならぬ事の起こって来たのを幸と云わねばならぬと同時に勝つ事は判つて居ても、小さい者が大きい敵と戦い行くを傍から見るとははらはらするものである。

早く佐伯さんが大学を出て彼のよき新しき小さき家庭に彼女を迎う可き日の来らん事を思わざるを得なかった。祝す可き年と日よ、日と時よ、御心のままに早く歩めかし。
嘉代ちゃんに手紙が書きたいけれども筆が動かない。

○1919年10月13日(月)

昼、加藤に電話を掛ける。十拳君との訪問、その夜の事と定まる。4時半まで例外として卓子に向かい三菱へ行く。昼間、三菱のカウンティングの後に十拳君を見つけた時は何となく愉快であつた。不意に入つて来た西洋人が□□らしく見えたのには一驚を喫した。

加藤の家は非常に立派であつた。珍妙な訪問も8時半にはすんだ。上柳の事が何かと話に出たので其の不真面目な恋を見る可く彼を訪問した。大変めんくらつて居たのがおかしかつた。帰宅すると十拳君からルソーの辞を引いた手紙が来て居た。

○1919年10月14日(火)

麻布。

○1919年10月15日(水)

ネックタイを丸善に買う。大学図書館へ廻る。Annalist無し、十拳君に返事を書く。佐伯さんを招く。

○1919年10月16日(木)

麻布より急ぎ帰る。帰つて見れば佐伯さん来らず。書きたくて書けぬものは大事な手紙である。Annalist June 23st. 古い箱の中から出て来た。大助かり。

○1919年10月17日(金)

神嘗祭。ローマ書を読み出したら午後になつてしまった。武田へ寄つて夕飯を頂いて中野へ行く。加藤と一緒に十拳君訪問のためである。谷口が刑法の試験の悪かつた由を聞いた。神経衰弱の激しいのにもかかつたと見る外無い相である。彼の気持には事の真相を見る余裕と聡明と謙遜とを欠いて居るのではあるまいかと思う。気の毒でたまらない。

大久保ではしきりにお庭に手を入れて居られた。大きな森の彼方に沈み行く夕暮の美し

さを眺めつつ、おば様と真の生命の片鱗を語った。おば様は確かに未だ救われては居らない。其の生命の見方に未だ未だ不完全と我儘とがある。乍併、何故かおば様に対しては僕は思つて居る丈の事を何の苦も無くお話する事が出来る不思議という外ない。

○1919年10月18日(土)

朝曇つて居た為に散歩を思いきつた。思いきつて見れば午後には好く晴れてしまった。髪を刈つて西片町へ寄る。丁度、佐伯さんが帰る所であつたのを少し居て貰い2時頃まで遊ぶ。“Messiah”を聞いた。何度聞いても本当によい。不真面目な僕の氣持が其まま正ちゃんに移り、正ちゃんから睦ちゃんにうつり、始めて僕の口を出てから4、5年の後当時の苦しみを今うけねばならなくなった。身から出たものは身を以て処分せねばならない自分自身を非難する辞を以て今の悪を殺す外はない。

I shot an arrow into the air,
It fell to earth, I knew not where;
For, so swiftly it flew, the sight
Could not follow it in its flight.
われ空に放てり矢を一つ、
そは地に墮ちぬ、何処かは知らず。
いとも疾く飛び去りて、眼の
その跡を趁ふべうもなかりけり。

I breathed a song into the air,
It fell to earth, I knew not where;
For who has sight so keen and strong,
That it can follow the flight of song?
われ空に吹息ぎけり一つの歌を、
そは地に墮ちぬ、何処かは知らず。
誰が眸が鋭くまた強からん
うたの翼に追ひしくほべう。

Long, long afterward, in an oak
I found the arrow, still unbroke;
And the song, from beginning to end,
I found again in the heart of a friend.
永く永く時を経て、一本の櫂に
われは見出でつ、かの矢折れでなほ遺れるを。
またかの歌を始めより終りまで
われは見出でし、一人の友の心にぞ。

(The Arrow and the Song — By Henry Wadsworth Longfellow) 「矢と歌」— ロングフェロー(小池辰雄訳)

ロングフェローの美しき美しき温かき穏やかなる詩一つすら僕にはつらい思い出の緒となる。Elman の Humoresque を聞く。ありのままの僕の心に静かにふれるものがあつた。是を諧謔曲と訳すは下訳である。

夜、東中野、藤井さんに伺つてローマ8章のお講義を伺う。佐伯さん来らばと思った。

○1919年10月19日(日)

前田多門さん。



先生「汝の父と母とを敬え……」。

おきるとすぐお湯に行つた。よきのんびりした日曜であつた。

兵隊に行く前の仕事の一手紙の整理である。今日はそれにかかる。色々の事を思つた。随分多くをさいた。是が生きて居る人間の手紙なのか知らと思う程がある。ずたずたに破つた。ずたずたに破くのは失礼ではない。僕の方がおそらくは後手である。当然破る可かりしものが3、4年余り長らえて今日に至つたという訳合なのである。一番多いのは石川、岩瀬、審三さん、正ちゃん、佐伯さん、嘉代ちゃん、十拳君である。

石川の若い頃を暫りに思わせられた。審三さんにこういう可愛いらしい日もあつたのかと思わせられた。随分沢山をさいた。が、さいている中に段々おちついたよい氣持になつて来た。

今日は母様が大手町へいらした。是で僕等と同じ信仰の持主になるとは思わない。固より思わない。第一この次の日曜に来られるか来られないかが既に問題である。それでも今日のようなお話の日はえりにえつて来られた事は誠に有難かつた。母様は是から正當に僕にクレイムなさる所をよく知れた事と思う。僕も一生懸命せねばならない。

お美喜さんが何かと世話をやいて呉れた。高島さんのおば様と嘉代ちゃんに母様を御紹介する。

本郷でおいしい卓子を三人で囲んだ。

○1919年10月20日(月)

9月号再校終る。麻布。

○1919年10月21日(火)

安倍さんの原稿と経済財政彙報とを除き10月号原稿悉く活版に出す。明日からは愈々整然たる事務の人たるを得る。学士会で内務、通信、大蔵省の少壮学士会を開くと云つて来た。出るのが嫌なのでことわる。

4時まで忙しい時間を暮らしてそのまま代々木の練兵場へ出る。美しき天地である。かくの如きを見た事無い。西の空はやや曇つて非常に完全な夕焼を見る事は出来なかつたが空全体としては見事であつた。

讚美歌を一人静かに歌いながら歩く。自分の氣分を作りつつあるに気づいて苦しくある。何時になつたら偉くなろう偉くなろうというこの小なる汚き野心の捨てられる事であろう。神様の御名を特別に称えつつ、神様の御名を特別に聖と見つつも何時になつてもすっかりとりきれぬこの刺を本當につらく思う。神様、あなたは一度は僕の心をあらひ給いました。あらひ給ひし結果、僕の心はあなたに対して燃えて居ります。しかも猶、人間である以上誘惑は益々来りつつあります。益々来りつつあります。益々増えつつあります。基督教と



普通人との差は一面に於ては誘惑の増加にあります。一面に於ては誘惑に勝つ原動力を創造せられたるにあります。とにかく何時になつてもこの人間の形態を備うる以上備うる間は誘惑は堪えません。何の日か早く来り給うて小なる身体にある多くの罪の源を洩らしめ給え。アーメン。「青字で「罪ノマストコロニ恩恵モイヤマス、アーメン」の書き込みあり」

溝部さんを送らんとして東京駅に行く。肝腎の御当人見えず。

畔上さん、^{コロサイ}哥羅西書ノ基督觀。^{コロサイ}哥羅西書第1章13、14、15節。：〔講演要旨省略〕

○1919年10月22日(水)

せわしき一日である。昼、本郷聯帶雇司令部に一年志願兵の事、即ち主計生と在京との事とに就きて頼みに行く。副官は留守で其の代りの人がそれは皆師団で決定さるる事で聯帶雇司令部は其の伝達をなすにすぎぬのであると云う。そう云う以上は何とも致方がない。空は曇っていた。それをも出懸けた僕の心はやや捕われて居る。捕われたるを残念と思う。情なしと思う。我が身体の中よきもの一つもすまざるを知る。身体の法ありて我を縛るとなすパウロの言の真なるを思う。「青字で「アーメン」の辰雄の書き込みあり」

落合は紙くずの原と化さんとする。もう少し遠き所へ出る外無きを覚った。明日は嘸好いであらう。

夜、静かな温き心を持つて嘉代ちゃんに書く。よき一日を暮らさしめて永久に彼女の母の宝ならしめ給え。

気がつくと又日記に圧迫される事一週間である。急ぎつけて忘るるを免れん哉。忘るるには余りに尊き一週間である。

○1919年10月23日(木)

フルンケル〔おでき・吹出物〕の療治は今日を以て終り。

朝、佐伯さんと今日の散歩につき打合せをする。曇って居たのが苦になった。2時半頃の電話で天気のためやめと決する。夜に入つて遂々雨になった。東京駅で鈴木から彼及粟屋の試験合格を聞いて牛込に急ぐ時にはまあ今日は出かけなくてよかったと思う程の降である。

小さな事とも見える。当然の事とも見える。乍併決して小さな事を以て看過すべき簡単なる出来事では無い。栗屋と二人で本当に有難き事を祝し合った。

風邪気でしつかり蒲団を冠つて寝る。

○1919年10月24日(金)

風邪は一夜を以て僕を去った。非常に忙しい日であった。西比利^{シベリア}関係の例の問題の一件にかかった。4時までにはすましてしまう予定だったが、他の用事に圧せられて出来ず家に



持つて帰らざるを得なかった。

今日は君代さん〔註：高島おば様の長女〕に書くつもりなので腹をきめて紅茶を呑んでかかった。西比利関係がすんだのが12時、龍ちゃんへの手紙がすんだのが40分、君代さんへのがすんだら3時近く、嘉代ちゃんへのがすんだのが4時であった。久し振りでこんなに夜を更かした。

○1919年10月25日(土)

役所をすまして帰ると流石にねむかった。4時少し前までねむり、大久保へ行く。会社の謀反団の事を伺う。又おば様に対する藤井宇平の陰謀を伺う。実に弱った人間と思う。藤井先生に伺う。佐伯さんは又見えない。一体どうしたのだろうと思う。

よき一週間であった。

○1919年10月26日(日)

朝湯に夜が明ける。静かに日曜の午を待つ。青木のおば様が見えたけれども、母様は僕と一緒にいらしった。

藤井さん、「聖書は命の本なりや」。内村先生、「十誠第6誠」。

今日は嘉代ちゃんは見えなかった。母様はもうお忙しいからと仰しやる。只それ丈ならば好いけれども。

外へ出ると頭の前から足のさきまで新調に固った栗屋がいる。彼の成功を祝わんとして初めは一白舎に集ったが気を換えて上野とする。よき一夕の食卓であった。食事終えて8時、武信君大事の椎のしたに座して何彼と無く語る。語る中に9時になった。四人で感謝と願いの祈を捧げお別れの歌を唱う。

おそくまで佐伯さんと二人で歩いた。不信仰な話だけでもと前提して僕は事が早すぎたのでは無いかと思うと彼の語るのを聞いた。又昨夜行き得なかったのは非常にお美喜さんが淋しがったためとも聞いた。大きく彼の歩まん事を願い、特に今夜も彼を待たれたお美喜さんに気の毒をしたと思つて別れる。

○1919年10月27日(月)

漸くひまになって来た。ひまになったと申して怠けて居られるというのでは無い。仕事に逐われなくてすむ様になったというのである。

昼には佐伯さんに手紙を書く位の余裕は出来た。例の手紙を返す。夜、田中隆一郎氏の結婚披露に。多くの人にあつた。僕とは全然異なつた世界に生きる人の真面目らしい、しかも云々なる生活を見た。どんな事があつてもこのお仲間入だけは御免である。



○1919年10月28日(火)

又齒に苦しめられる。高橋へ行く。4、5日焼かねばいけないとの事である。この間金曜日に僕が書いた手紙は君代さんが見て驚かれてはいけなから書き返す様にとの事であった。土曜日に書いたのは僕の氣に染まなかった。今日は漸くよき手紙を書く事が出来た。読んで祈の中に米国へ送る。同時に八尺さんにも近況をお知らせした。いつか八尺さんをすっかり解したいものである。

○1919年10月29日(水)

齒に苦しめられた。団さんから帰つては日記書きに忙しい。

○1919年10月30日(木)

漸く飯塚元老の「中欧に於ける新興諸国の経済的将来」を活版に出す。随分長い間の宿題であった。石坂が早くから僕に任せてしまえばもう十日も早かつた事であろう。仕事一つ出来ぬ癖に調査調査と調査をせねば人間では無いように思う現代若手官吏の通弊を遺憾なく發揮して居る。凡ての人が現代に生まれた事を幸と観ずるは好し。現代に生まれて真の現代的たらんとするはよし。されどされど現代の真意を解せず只現代的たらんとするはどう考えても僕には出来ない所。僕は何時になつても唯神の御手のままに現代離れの現代に生きさしめられん哉。

十拳君と明日午後の散歩を約束し正ちゃんを誘う。

9月号漸く出来る。齒痛む。

家へ帰ると嘉代ちゃんから手紙が来て居る。明日お家中で東京を離れた所で散歩がしたい、来ないかとある。渋谷7時半、品川に8時までとあるから東海道すじだけは確かである。僕は行きたい。十拳君の約束があつても取消——撤回を願つて行きたい。母様は行くなと仰しやる。十拳君との約束が無くとも行くなと仰しやる。母様は僕の行きたい気持は好く判る。好く判るけれども、誰も外に行かぬ所へ僕丈行く理由がないと仰しやる。又理由があるとするとも夫は余り突飛だと仰しやる。僕には母様の行くなと仰しやる意味はよく判る。しかし、母様の見方にある見方の加つた又は見方の異なる、僕から見れば母様の生命観は余りに世間的余りに卑怯と思う。

誰でも一番信用する人に伺つて御覧なさいと母様は仰しやる。内村先生にでも伺つてごらんなさい。とんだ所へ内村先生が出てきた。大変な事になって来た。何時聖書が出て来ないとは限らない。

「母様は無条件に行くなと仰しやるのですか」

と伺う。「そうだ」と仰しやる。致方ない。嘉代ちゃんを呼び出して電話でお断りをする。僕が行かなければ嘉代ちゃんとおば様とは行かれないのである相。お気の毒にと思うけれ



ども。

本郷へ出て、母様に「政美も随分判ら無い」といわれた今夕の思い出に R. Focken の
“Religion and Life” を買う。空は暗かった。

○1919年10月31日(金)

天長節祝日。ゆつくり寝た。おきると雨である。どんなにか落胆したる人の多きと思う。
高橋さんで午前中待ち暮らした。齒は益々痛んで来る。待つ間にオイケンの「宗教と人生」
を読んだ。理解から見た宗教観はこれだとどまると思えた。抑々、宗教という辞夫れ自身
が水くさい辞である事は前から思つて居たが、十拳君の引いたルソーの辞と云い、今又オ
イケンと云い、よくそれで生きて行けたなと思う。だが是丈よんで置けば大抵な人の「へ
りくつ」には、君もつと組織だった「へりくつ」を教えてあげようかと云えるかも知れ
無い。

十拳君との散歩も雨で駄目である。齒は痛んで来る。午後は又ゆつくり眠る。目がさめ
たら夕方である。これから筆をはしらせて、たまつて居た聖書の講義を急いで録し明日か
らは最後の巻に入らん哉と思う。

夕方、雨上りに夕焼が美しい。るりの空にばら色の雲である。乍併以てこの日記の表題
とするにも足りない。この日記の中心は嘉代ちゃんとのこの一月を中心とする。是を通し
て神様に一步近づき古き心の危くも泥濘に汚されんとしたるを救われし感謝を忘るる事は
出来ない。

「小縦よ、小縦よ、御名を讃めまつる」

といいしに對する事を要する。對するとは主觀的に對するを要する乎、又は客觀的に對する
足るか。出来る事なら是を通して彼女の前途を祝福したいが僕の願である。僕が彼女に書
いて送つた文句の中、一番尊きは、

「^{つややか}艷麗はいつわりなり、^{うるわしき}美色は呼吸の如し、唯エホバを^{おそ}畏るる女は誉められん」

(箴言31・30)

であつた。又すきな聖句である。是を以てこの巻の名とする。祈らしめ給え。アーメン。

10月12日 内村先生 「十誠第4誠」…〔講演要旨省略〕…。

10月19日 前田多門氏 「欧米視察談」…〔講演要旨省略〕…。

10月19日 内村先生 「十誠『汝の父と母とを敬え』」…〔講演要旨省略〕…。

10月26日 藤井さん 「聖書は生命の書也や」…〔講演要旨省略〕…。

10月26日 内村先生 「十誠第6誠『汝殺す勿れ』」…〔講演要旨省略〕…。

10月18日 藤井先生 「ローマ書第8章(其2)」…〔講演要旨省略〕…。

10月25日 藤井先生 「ローマ書第8章(其3)」…〔講演要旨省略〕…。

(11月4日記)

